

中国社会の表と裏に接して

—世界第二の経済大国に疑問—（後編）

軍事アナリスト 西村 金一

四 中国商品の信用度

北京のメイン通りにスポーツウエア「ナイキ」の店があった。ポロシャツが約五千円で売られていた。行くたびに店の中をのぞいてみたが、買っている人はほとんどいない。その店は、二〇一年の春には閉店した。北京でタクシーの運転手の月給が三万円ちょっとだから、一般人民が五千円もするポロシャツを買うわけがない。他にも、アディダスなどの有名ブランドの本物の店があるが、お客はほとんど入っていない。それなのになぜ、店が経営できるのか不思議な感じがする。

中国人が着ているナイキやアディダスのシャツの大部分は、偽物のシャツだ。その偽物は、路上や小売店で売っている。例えば中国製の靴下は、すべてナイキ、アディダス、グッチなどの外国メーカーのマークが入っている。中国人は、それらが商標ではなくて、デザインとと思っているのかもしれない。

でも、靴下はなかなか良い品で三〜五足で十元（百三十円）、一足三十〜四十円だ。日本で安売りの靴下よりも質がいい。私は、必ず買って帰る。

北京に「秀水街」という名の地上五階地下三階のデパートがある。その品物は、全てブランドものの偽物である。ロレックスの時計、グッチの靴下、ルイヴィトンのバッグ、ポロのシャツ、バーバリーのポロシャツ、アイフォンなどの偽物が飾つてある。値札は、海外の通常の値段と同じだ。そこで十分の一〜五分の一の値段まで下げさせて購入する。実際に品質も悪く、ロレックスの時計は、数日で動かなくなる。それぞれの店には、「この店の品物は本物であることを証明する」と書かれた証明書が飾つてある。しかし、どの店のものもおかしなことに全て同じデザインだ。証明書さえも偽物なのだ。

また、偽物にはランクがあり、上のクラスからスーパーA、A、B、Cがある。スーパーAやAランクの品物は鍵が掛かる特別の部屋に置いてある。これ売ってる店員は、「このハンドバッグは、偽物でもスーパーAだから、本物と同じ。だから千円（約一万三千円）だよ」と自慢して売り込もうとする。スーパーAは、製造した工場の完成品で横流しされたもの、Aは、工場から材料が横流しされて別のところで製造したものである。秀水街では時々、中国公安の抜き打ち捜査があり、その都度

閉鎖されるが、数日後には再開される。捜査は外国に対するポイズであり、公安が偽物デパートから賄賂をもらい、ぐるになっっている。

北朝鮮に近い延吉の町で朝鮮人参を買ったが、何故かアメリカ国旗のシールが貼られていた。朝鮮人参だから北朝鮮か中国で栽培されたものであるとわかつていながらもかかわらず、米国旗のシールを貼るその理由が理解できない。おそらく、米国の物はなんでもいい、だから朝鮮人参にも米国の国旗を貼れば、高い品質の朝鮮人参だと思われるという論理だと思われる。全く理解に苦しむというか笑ってしまう。それでも私は、当然中国産の朝鮮人参だと思って買っている。

パソコンソフトや音楽CDの偽物も多い。町のスーパーの出入り口近くに、段ボール箱があり、おそらく数千枚にもなろうDVD・CDが堂々と売られている。公安も賄賂をもらっているから取り締まらない。

偽物の極めつけは、百元札（約千三百円）の偽札だ。偽札はいつもあるわけではないが、時には多量に出回ることがある。日本の友人が、知らないうちに七枚保有していた。その偽札はすかしがなく、すかしを真似た印刷であり、真券には目印の凹凸があるがそれもなく、同じ番号のものが何枚もあったり、色が少し違ったりする。偽札を持ってしまったら、使うこともできない。中国人は偽札が普及していることをよく知っていて、百元札を受け取る時は、必ずすかしを見て、凹凸部分を確認する。それも一枚一枚だ。だから、偽札の場合には受け取って貰えない、ランプのばば抜きのようなものだ。二〇一三年二月七日の共同通信ニュースによると、中国広東省の公安当局は六日、同省内で人民元札の偽造工場を摘発し、二億千萬元（約

三十一億五千万円）分の偽札を押収、三十七人を拘束したと発表した。中国紙幣が粗雑であることが大きな問題である。また、一月二十八日の産経ニュースに中国北部の地方都市で大手銀行の現金自動預払機（ATM）から引き出した現金がすべて偽札であったという記事があった。

中国人は、偽物でも質がいい物であれば、うまく生活に取り入れ、質の悪い物であれば排除する生活力を身につけている。このようなしたたかな中国人に著作権を守れ、偽物を作るなどと言っても、彼らにはそのような声に耳を傾ける気持ちは全くないと言っている。売る側も買う側もともに利益を享受している社会、世界の法律の基準を守らない集団であり、犯罪の意識がない。中国は今後、世界経済規模第二位の国家としての責任を果たすべきであろう。

五 立派すぎる建築物や物

北京の天安門広場から東西に広がる道路がある。中国が威信をかけて作った道路であり、その道路に沿って政府系の威厳がある立派な建物が並ぶ。ところが、その道路から百メートルほど入ると、歩道のタイルは壊れてデコボコ、店の下水から流れ出た悪臭がする水たまり、老朽化したボロアパート、不衛生な大衆食堂（日本人には食べられないような店）がある。夕方になると



全て二セの100元札

短パン、上半身裸で歩く人も見る。表通りと裏通りの差があまりにも大きすぎる。

中国では、用途の規模を遙かに超えて大きいものがある。中国軍の駐屯地を正面からみると、門構えが極端に大きい。門なのに一つのビルディングのようだ（写真1）。

田舎の五つ星ホテルのロビーは、日本のホテルに比べて遙かに大きい。ホテルにお客はほとんどいないのに、ロビーだけが馬鹿でかく、閑散としている。そこに置いてある一人用のソファも馬鹿でかい。また、肘掛けは腕を添えられればいいと思われるのだが、お尻も載せられるくらい大きい。なんのためにそのような大きく作るのか、日本人の私にはまったく理解できない。大きいことが、そこに座る人の権力を見せつけるのに適しているのかもしれない（写真2）。

地方都市には、大きなデパートがある。一階は海外の化粧品売り場で、その上には、外国製の時計・スニーカー、高級なスーツや靴の売り場がある。だが、それらを購入している人は極めて少ない。このデパートの経営は成り立っているのか不思議でならない。



写真1 唐山に所在する軍司令部



写真2 石家荘のホテルのソファ

い。中国人が品物を買っているのは、市場やスーパーマーケットがほとんどだ。北京の西単（日本の銀座に相当）の店には、女性用のブーツが売られていた。長時間、どれくらい売れるのか見ていたが、それを手に取って見る人もいない。飾つてあるだけで、購入する人はほとんどいないのではないかと思う。日本の女性は、ブーツを何足も持っていると思うが、北京で、ブーツを履いている中国人女性をほとんど見ない。地方のデパートやブーツを売っている店も品物は飾つているだけのようであり、見せかけや虚栄で建設されたのではないかと思う。

地方都市に行くと、マンションの建設ラッシュだ。そこに、誰が入るのか、人は入るのかを見ていたことがあるが、たくさん売れている気配はなくそこに入居する人もあまり見ない。中国のマンション建設の状況から、近い将来バブルがはじけると思う。だが、中国政府はバブルの実態をうまく隠し通すだろう。

六 賄賂

中国での賄賂は常態化している。中国長期在住の友人に聞いたところ、中国で事業を興すには許可をもらわないとできない。許可をもらうために市政府に申請する。事業の規模によって村・県・市・省・国のレベルになる。それぞれのところに申請書を提出すると、申請書の書類は、積み重ねられる。許可を得るため賄賂を渡すと、積み重なった書類の一番上に載せられ、書類の手続きは開始される。賄賂を渡さないと、提出した書類の上に、お金を払った人のものが置かれていくので、書類が下の方に移動していく。そして、いつまでも手続きが進まないのだから許可が下りない。

許可が下りないので、なぜか理由を聞きに行くと、「誰々さ

んに相談してみなさい」と言われ、その人のところに行くと、「お金をいくら払いなさい」と言われる。そのお金を払うと許可が下りる。県・市・省などの政府の役人は、直接お金をもらわないので、その人が賄賂で逮捕されることはない。仲介をした人は政府の人間でないために、賄賂を受けたことにはならない。役人の賄賂は、内部告発か権力争いに負けない限り明るみには出ない。

お金の渡し方には、上記の他、例えば月餅というお菓子の箱の底にお金を入れて渡すこともある。中国の笑い話で、自分の仕事をとろうとして、影響力のある人に、月餅の箱に札束を入れて賄賂として渡した。受けた人がまたその上の上司に渡した。上司が月餅の賞味期限を見たら切れていたなので、家のお手伝いさんに渡し、お手伝いさんが箱を開けたら、札束が入っていて驚いて困ったというものである。

日本の水戸黄門の時代劇で、悪徳商人が悪代官に、お菓子の箱に小判の束を入れて賄賂を渡す場面があるが、現代の中国では、同じようなことが行われている。

その他に、高級料理で接待し、銘酒をお土産として渡すというのがある。

某県警の人から聞いた話だが、日本のVIPが中国を訪問すると、高級料理と酒と女で三日三晩接待漬けにされる。これでは中国側の要求を聞かざるを得ない。中国に不利益になることを言えなくすることを狙っているらしい。

仕事で中国に行くことがあったが、毎晩、酒と中華料理を食べ放題、飲み放題だった。ただ、豪華そうな中華料理は口に合わず、酒は中国のビールと白酒だったので、接待されているという感じはなかった。まずい料理を毎日食べさせられていると

いう印象だった。

市政府の役人の給料で、分不相応の立派な家や自動車を購入できる訳がない。莫大な賄賂を得ているから購入できる。また、そのお金で、子息を外国に留学させる。日本でも家を購入する。そしてその家に住まわせる。中国の土地を所有できるのは約五十年と言われ、永久に自分の所有物ではない。日本で購入した物件は、永久に自分のものになる。不正が発覚して失脚したときは、家族を外国に所有する家に逃がせばよい。

北京空港のモノレールが故障して、外国に出国する人達がターミナルに行けなくなり、空港の移動経路が混雑して、身動きが取れなくなることがある。その時、我々業務の通訳が交渉してきますと言って、どこかに立ち去った。すると、話が付いたのでこちらからどうぞといって、どこかの通路を使って、ターミナルに行くバスのところまでたどりつけた。そして、バスに乗り検査所にスムーズに行けたのだ。後でその通訳に、「あんなに混雑しているのにどうして我々だけが行けたのか」と聞くと、「交渉次第ですよ」と答えた。たぶんお金で便宜を図って貰ったのだろう。

七 会社内部の共産党社会

二十年前に上海に進出している中堅電子部品メーカーの工場を見学したことがある。そこで、日本人の案内者から聞いて強く印象に残っていることがある。それは、「会社の中には経営組織以外に共産党の組織があって、経営者が入れない共産党の会議が行われている。経営者は、そこで何が話されているのかまったくわからない」と説明を受けた。また、その会社の社員の月給は、会社が社員に直接渡すのではなく、一端、会社の共

産党の組織に渡して、共産党がその中から一定の金額をピンハネして、社員に渡す。中国の市場経済主義というのは、会社経営者が考えているとおりにではなくて、共産党の意志が入り、共産党にお金が入る仕組みになっているのだと、その時私は思った。

二十年経過した今年の一月に、電子版産経新聞ニュースで、上海の日本電子部品メーカーの社長を含む日本人十名が、社員に取り囲まれて軟禁された記事と会社の写真が掲載されたので、前述のことを思い出した。会社経営者が会社内部の中国共産党員の意見を聞かなかつたか、党員の身分保障の件で、そのようなことになったのかもしれないと見学したときの説明を思い出した。中国では、共産党が政治的コントロールをするのみで、経済に関して特に会社経営は、経営者に主権があると考えていたが、共産党は会社経営をそして資本主義をもコントロールしている社会なのだと思感した。

八 ほんでもないトラブルに遭遇

(一) 突然のバス火災

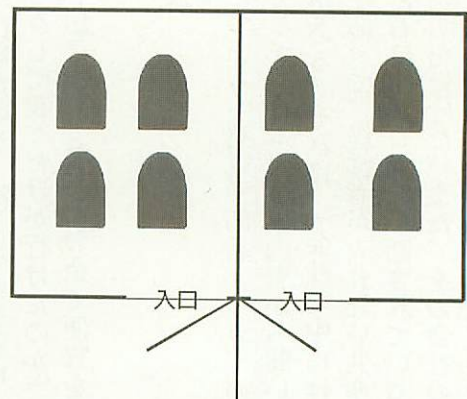
ある時、仕事で作業現場に中国外務省や国防調達のバスで移動した。バスが作業現場に到着し、全員が降車後駐車場に移動中、突然炎に包まれたことが一度あった。到着の時間が遅れていれば、我々チームの半数は黒こげになっていたかと思うとぞっとする。日本では、乗っている貸し切りバスが炎上することなど聞いたことがない。

(二) 日本人の誰も想像できない公衆トイレ

北京から省の都市へは、航空機で移動した。その後、市都へは、バスで五〜六時間、ある時は八時間ほどかけて移動する。

バスで移動する時には、中国大陸の広大さと、どこまでも続く平原にウンザリというか、驚かされる。

省都から市都へ移動する経路には、サービスエリアがない。寄るのは、中国石油などのガソリンスタンドだ。そのトイレが壮絶きわまる物である。ポットン便所で、入り口のドアはない、中に入る



中国のガソリンスタンドのトイレ (上から見て)

と一つ一つの仕切りはない。大小の区別もない。便器と同じ穴が三〜五个開いているだけだ。排泄物の堆積量も驚くほどすごい。女性用も同じだ。北京から派遣された中国人女性兵士でも、使用するのをかなり躊躇していた。男性兵士も、こんな様子を日本人に見られて恥ずかしそうにしていたのが印象に残っている。

これで近代国家と胸を張れるのか。新幹線の整備も自慢かもしれないが、このトイレは国家の恥だと思う。

(三) 真つ赤に熟れたスイカ

中国では、一年中スイカが食べられる。真つ赤に熟れたスイカでも時おりスイカの美味しい味がしないことがある。その時は不思議に思っていたのだが、二〜三年前に、中国のスイカが爆発して割れることが話題になった。その理由は、短期間に栽培するために、スイカの苗に特別の薬を散布するらしいのだ。

その量が多すぎて、成熟する前に、爆発して割れたというのだ。我々がホテルで食べていたスイカは、おそらくこのような方法により栽培されたものと推測できた。つまり、農薬などを多量に投入されたスイカを食べていたことになる。

中国の食品には、各種薬品が混入しているといわれている。特に有名になったのが、赤ちゃん用の粉ミルクだ。中国では、知らないうちに農薬やホルモン系の化学薬品が多量に入れられているものを食べている可能性がある。

四 高層ホテルのエレベーターの混雑

二十階建て以上の高層ホテルだと、エレベーターは五〜六基ほど設置されていないと、大変混雑する。中国で経験した高層ホテルでは、三基のうち一基が故障していて、二基だけしか動いていなかった。二週間ほど滞在したのだが、故障しているエレベーターは動くことがなかった。したがって、レストランに移動するために、二十分以上も待つことになった。

高層ホテルでなくても、低層〜中層ホテルで、狭い小さいエレベーターが一基しかないところが多く、混雑する。たまに、エレベーターの表面はあるのだが、扉が開かない見せかけのエレベーターがある。建物の外見は一見豪華だが、内容はお粗末といった建物が結構ある。

おわりに

私は、中国に滞在し人と接して、「親しみやすい心」「思いやりの心」を感じた。現実にもそのような心を持った人々が多いと思う。だが一方で、中国国内には、大気汚染・水質汚染が桁違いにひどいこと、偽物が氾濫していて中国人が中国で売っている商品を信用していないこと、賄賂が隅々まで蔓延している

実な人々に諦めの感情が起きていること、表には権威主義的な見せかけで作られている建物・物が多いこと、表の富と裏の貧困が同じ場所で同時に見られるなど、とんでもないことに遭遇して驚きさえも感じる。中国は本当に世界第二位の経済大国なのかと疑いたくなる。

前述したように中国は容易に解決できないとてつもなく大きい問題を抱えているのが実情である。そのため、見栄やごまかしなどの虚像で問題を覆い隠し、そして国民の大きな不満が爆発しないように、周辺諸国との間に領土問題を創造したり（石油資源確保の目的もあるが）、日中間の歴史問題をあぶり出し、国民の不満を外に向けてそらしている。これが、「内政問題を外交問題にすり替える国家戦略」と言われる由縁ではないだろうか。

二〇〇九年、中国の英字紙チャイナ・デーリーが伝えた世論調査では、回答者の九十一パーセントが「政府が発表する統計を信頼していない」と答え、米国ヘリテージ財団の研究員は統計が中国共産党によって『つくられている』という疑惑をぬぐい去れない」と語った。私も、前述した中国の実状を見るかぎり、中国が発表しているデータには疑問を持たざるを得ない。中国人も外国人も、中国が作って見せている虚像や作られているデータでごまかされていると思う。

中国がこのような国家戦略を展開していると、ゆがんだ国民が増加し、かえって周辺諸国から嫌われる国家になってしまおうと思う。私を感じ取った中国国民の親しみやすさ・思いやりの心を大事にして、周辺諸国との信頼関係を構築したほうが、発展の速度は遅くとも、外国に信頼され尊敬される国家、名実ともに世界経済第二位の国家になれるのではないか。